

PHOTO ● 立木寛彦

ある作家の死に託された日本のことども

日本の近代化の波のなかに、洗われ、埋もれてきたものを、私たちは一切合財忘れようとしているかに見える。しかし、伝統的なるものに目をそむけ、否定しざるだけとするなら、この国に住む私たちは、一体何者なのだろうか。作家三島由紀夫の作品の英訳という作業を通じて、ドナルド・キーンさんはそのことを考え続けているようだ。なぜ、日本人なのか、なぜ日本文学なのか。あざやかな日本語で語ってくれた。

ドナルド・キーン

1922年、ニューヨークに生まれる。コロンビア大学で仏文学を学び、同大学院で東洋文学を専攻。その後、イギリスのケンブリッジ大学へ遊学、日本文学の研究をつづける。53年、京都大学大学院に留学、日本文学への傾斜を深める。日本文化・文学の海外への紹介に努めた賞により、75年、勲3等旭日中綬章を、83年10月国際文化交流基金賞を受賞。主著に「日本人の西洋発見」「日本の作家」「日本発見」、現在、大著「日本文学史」を執筆中。

海軍少尉としての日本人との出会い

初めて、わたしが日本へ来たのは30年前、昭和28年の8月です。その前に第2次大戦中、海軍の日本語学校で徹底教育を受けて、海軍少尉として日本人捕虜に接した経験があります。軍事文書の翻訳などもやりました。日本との出会いということではそれが初めてですね。

戦後になって大学へ戻りましたが、初めて日本に留学できるようにになったのが昭和28年のことなんです。そこで、さっそく京都大学へ留学したわけです。わたしの日本研究の本当の出発はここからですね。

その時には芭蕉の研究をしようと思っただけで、近代文学にはあまり関心はなかったんです。

日本へ留学する直前まで、わたしは英国のケンブリッジ大学で5年間教鞭を執っていたんですが、その時に日本の中世文学に魅かれるきっかけがありました。芭蕉は俳句のいくつかが英訳されてはいましたが、紀行文の翻訳はなかったんです。それでわたしは、「奥の細道」をはじめ、紀行文をぜんぶ訳そうと思ひまして、それには日本へ行くのがなんといつても一番いい。

ところが、わたしが京都に着いて間もなく、「日本文学選集」を作らないかという話が英国の出版社からあったん

です。

それまでそういう本がまったくなかったために、外国の教室で日本文学を教えることがひじょうにむずかしかったです。あるものといえば、平安朝のふるめかしいのが教えるくらいで、とても教科書には使えない。

そこで、そのしごとを引き受けることにしたんです。とても、意義のあるしごとです。

それは、ニューヨークの出版社から2冊本になって出まして、上巻が古代から徳川末期まで、下巻は近代現代文学。それが京都にいる間のわたしの主なしごとになりました。まず編集して、そして翻訳、いろいろな人に協力してもらったりして、より良いものに仕上がったと思います。

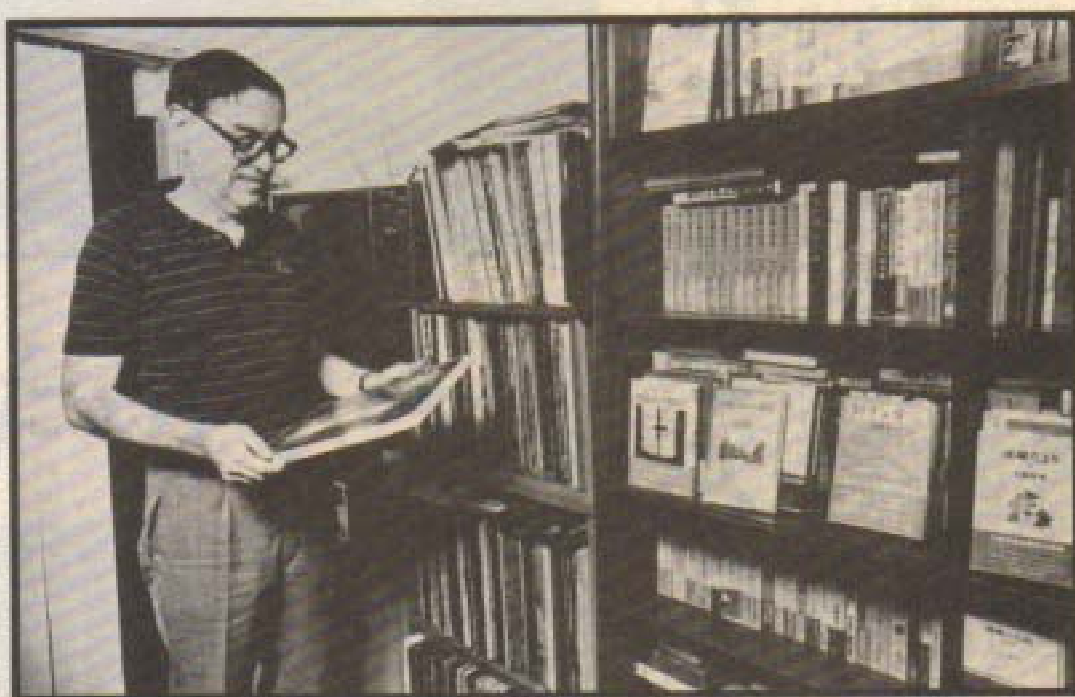
この2冊本が出版されたために、初めて外国で日本文学が教えられるようになったんです。自分でいうのもおかしいですが、それが事実なんです。特定の作品の翻訳はあっても、「通史」の意図をもった翻訳はなかったのですから。

芭蕉については当初から研究するつもりでしたが、日本の近代現代文学については京都へ来るまではほんのわずかしかりませんでした。英国にいた時に、著名な翻訳者であるアーサー・ウェイリー先生の知遇を得たんですが、先生のところへ谷崎潤一郎先生が「細雪」を送って来たんです。それを

わたしはいただいたんですが、関西弁がぜんぜんわからない。とにかくぜんぶ読むことは読みましたが、日本の近代現代文学はその「細雪」と他にはほんのいくつか読んだことがあるだけです。というのは、

その頃は日本の本は英国に取り寄せることができなかったんです。代金を払うことができなかった。京都へ来てからは、やはり周囲の日本人や日本社会に興味をもちまして、自然に日本文学を読むようになりました。もっと新しい文学が日本にもあるとわかったのは京都に来てからですね。

ただ三島さんの「潮騒」だけは英国ですてに読んでいました。どういうきっかけだったかは忘れましたが、初版本が手に入ったんですね。ですから、たいへん才能のある作家だということには日本へ来る前から知っていました。のちに、三島さんの作品を翻訳することが、わたしの重要なしごとになること



外国の教室で、日本文学を教える「通史」的なものを求めて初めて翻訳した

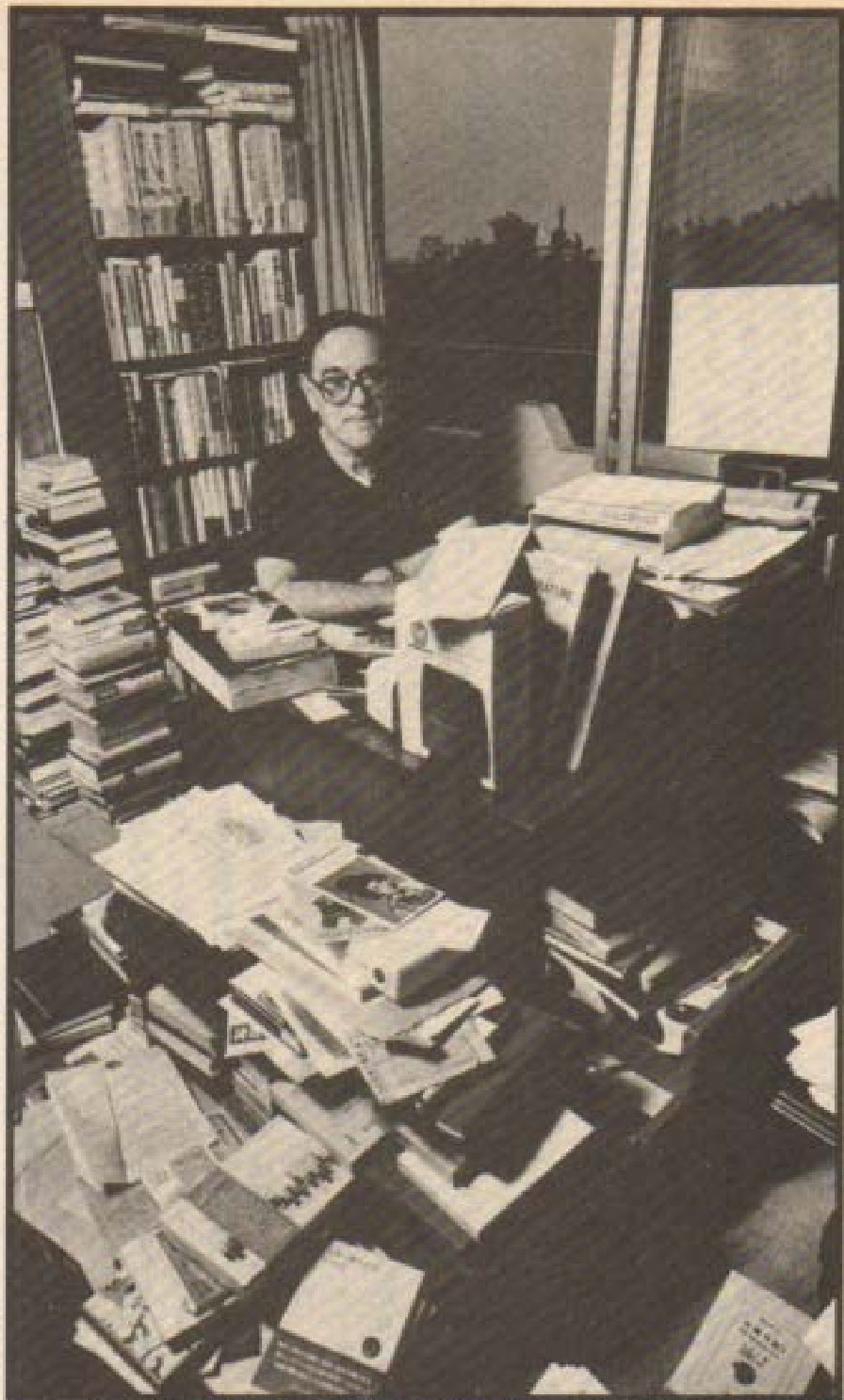
を思えば、運命的な出会いですね。

もう一つは、日本の伝統的文学が現代にもまだ生きていくかどうかということに興味をもっていました。当時の日本は、「伝統」というものを古くて封建的だという理由で否定していたんでしょう。そんなものは1日も早く捨てたほうがいいという考え方だった。

伝統文学はもう刺激を 与えることができないのか

日本の伝統的文学はまだ日本人にとって価値があるのか、まだ刺激を与えられることができるのか、その点に関心をもっていたんですよ。その時から現在にいたるまで、それを探りつつ書いてるんです。

そして、当時の日本の若い作家で、伝統に一番関心があって、造詣が深かったのは三島さんでした。わたしが初



「三島さんに会ったのは、三島さん自身の作品よりも、三島さんと古典との関わりを聞きたかった。」

めて三島さんに会ったのも、そのことを聞きたかったからなんです。三島さん自身の作品よりも、三島さんと古典との関わりを聞きたかった。日本の代表的作家に、わたしのテーマについてたずねたかった。

そのとき会った場所は歌舞伎座です。ちょうどその時三島さんの歌舞伎作品が上演されていましてね。三島さんは、あの世代の作家としては珍しく、歌舞伎のセリフが完全に書けた人なんです。それがきっかけになって、東京に出る

たびに会うようになったんです。

ただ、伝統ということでは三島さんも、また谷崎さんも日本人の間では別の印象が強いようですね。耽美主義であるとかデモニーニッシュ、むしろ「細雪」や「潮騒」といった古典的な作品

は、少数派に入るといった印象が強い。でも谷崎さんの最後の、そして一番大きなしこは「源氏物語」の現代語訳です。それに、時代物の作品がとても多い。それに比べると、川端康成さんは古典的といわれながらも時代物の

作品はひとつもありません。三島さんも最初から歴史物が多かったですね。「花ざかりの森」「中世」などの初期の作品はもちろんです。他にもたくさんあります。

しことから、おおぜいの日本の作家に会っていますが、とくに印象深いといえば三島由紀夫さんですね。なんといっても一番つきあいが長かった。初めて会ってから、三島さんが自決するまで、17年間もずっとつきあっていました。三島さんは、わたし以外の友だちとは必ず1度はケンカしたりしているんですけど、わたしだけはそういうこともなく、ずっと仲が良かったんです。わたしの知らない友だちではいたかも知れませんが。

しかし、たとえば「愛国忌」で演説したりする人などは、1度は仲たがいをしている。三島さんからそう聞いています。

17年といっても、わたしはその間ずっと日本にいたわけではありませんが、三島さんがアメリカへ来たときに会ったりとかで、とにかく途切れずにつき会っていました。

三島さんという人はとてもきちょうめんな人でしてね。いつも手帳を持ち歩いて、それにスケジュールが書き込んである。約束を忘れるなどということとは考えられない人なんです。

しかし、一番印象的だったことは、原稿です。実に読みやすい楷書で、

略字などまったくなくて、欄外の書き込みもまったくない。それは、彼の印刷屋さんに対する礼儀だったとわたしは思っています。

そのように美しい原稿は、もちろん清書もしていたと思いますが、別の理由もあります。三島さんは小説を書く前にプランを立てるんです。大きな紙に詳しくあらすじとか人物の動向とかを書いてしまいます。それを覚えてき上れば、あとは簡単だといっています。つまり骨組みさえできてしまえば、肉付けは簡単だということなんです。そして、戯曲のセリフなどは、たぶん直す必要などなかったと思います。

わたしは「天才」という言葉はめったに使わないんですが、三島さんは本当の天才だったと思います。下書きもせずにあれくらいきれいな原稿を書ける人はそうたくさんはいない。苦勞して良い小説を書くのも立派なことだと思いますが、苦勞しないで立派な小説を書ける人はめったにいませんね。

三島由紀夫が通した3通の手紙の宛先

翻訳をするのにもずいぶんお世話になりました。原作を読んでも意味のわからないところなど、電話をするといねいに説明してくれるんです。着物の柄とか料理とか、詳しく書いてあるのてわたしにはまったくわからない。一流の料亭の献立をそのまま出してあ

るんですが、読んでもわからない。1つひとつに美しい比喩の名前が付いているでしょう。翻訳のしようがないんですね。そこで作者自身にたずねたら、着物のことは母から聞いたので母に会ってくれということ、また、料理のことは、ある料亭から一番高い料理の献立をもらってそのまま使ったので自分にもよくわからないと笑いながらいっていましたね。

でも、翻訳についてはひじょうに熱心だったですね。自分の作品が海外に紹介されるということにとっても関心をもっていました。というのは、三島さんが自決をする直前に、3通の手紙を残しているんです。そのうちの2通までが外国人に宛てたもので、1通はわたしに宛てたもので、もう1通はわたしの友人に宛てたもの。そのわたしたち宛ての手紙の中で、「豊饒の海」の英訳がぜんぶ出るように世話してくるよう書いてありました。

三島さんは武士として死にたかったけれど、死ぬまでやはり文学者だったということですね。そう考えるのが自然でしょう。だから、自分の文学が海外で正しく理解されることを望んでいたということですね。

とくに「豊饒の海」については海外に期待していたようですね。これは日本のジャーナリズムは恥ずかしく思わなければいけないことなのですが、第2巻「晩の寺」は、日本ではついにた

だの1つも書評が出なかった。あれだけ著名な作家のたいへんな力作なのに、1つも出ないなんて考えられないことです。三島さんはとてもがっかりしていましたね。翻訳が出れば外国で書評が出るだろうといっていました。

日本のジャーナリズムは、いろんな意味でみんな敬遠してました。1つは仏教の大きく出る小説ですから、仏教のことを知らないと思われている。それと、当時すでに三島さんは危険な人物だと思われていましたので、三島さんをほめると右翼であると思われやしないかと心配していた人もいたようですね。

三島さんが市ヶ谷で自決したとき、わたしはニューヨークにいました。日本では正午でしたが、ニューヨークは夜中の12時、12時から朝の7時頃まで電話が鳴りつばなしてました。

その直後にニューヨーク・タイムズに三島さんのことを書いたなら、読者からの手紙が200通以上来たんです。しかも、すべて良い手紙。それまで時々日本のことを書くでしょう。すると、「日本へ行ってがっかりした」とか「あなたは日本を知っているような顔をしているけれども、われわれ朝鮮人はちがう日本を知っている」とか、そういうような手紙が必ず来るんですが、このときに限ってイヤな手紙は1通もありませんでした。

そして、共通していたのは、自衛隊

のこととかはまったく触れずに、現代文明への不満というように解釈していたことですね。

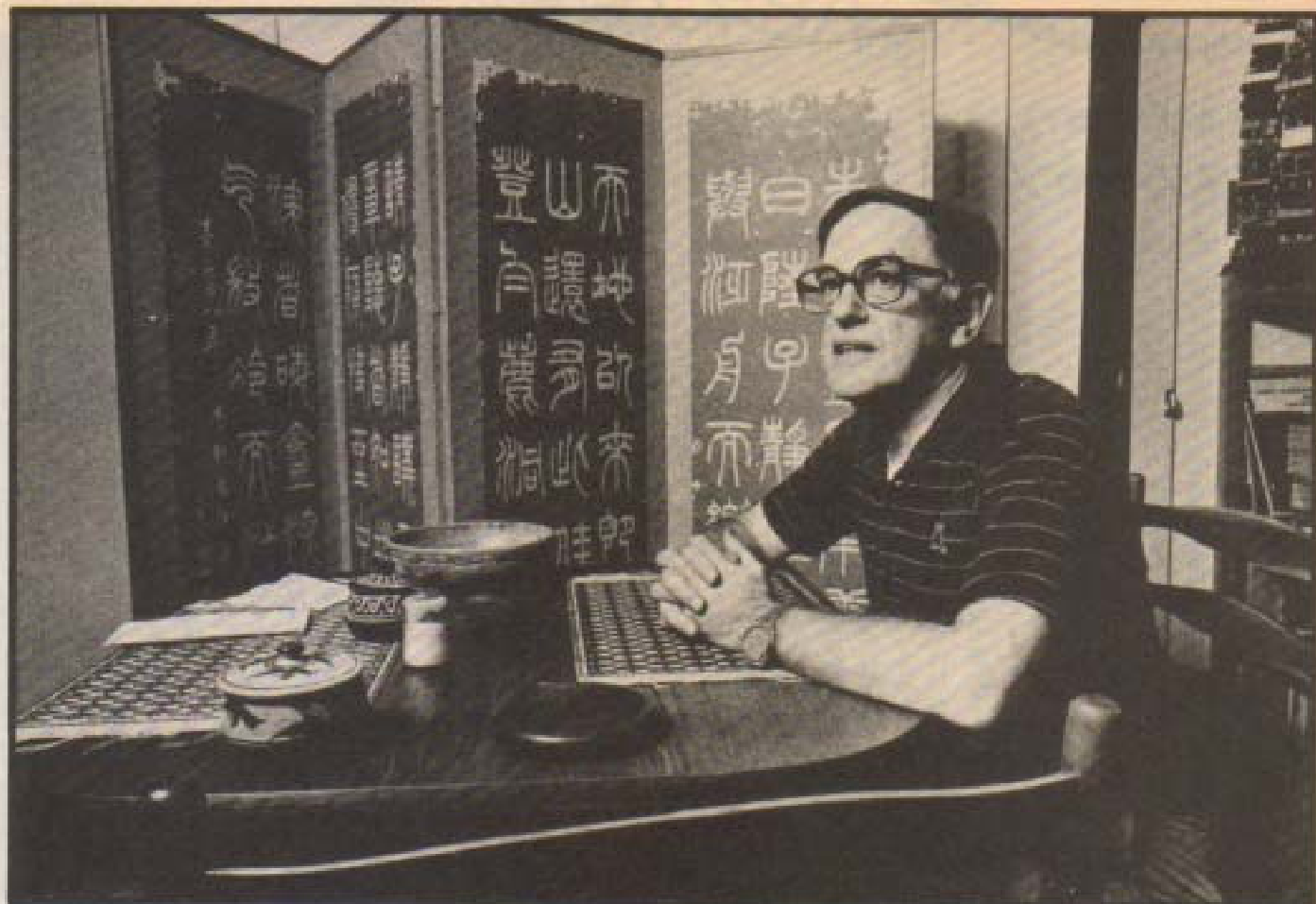
日本では佐藤総理が「気がいざだだ」とか、不親切な作家が「三島さんはもう書けなくなっていた」などといったりしましたが、外国ではそういう考え方はまったく聞きませんでしたね。むしろ、自分たちと密接に関係のある問題として受けとめていました。

外国人で自決した人はあまりいませんが、象徴的なジェスチャーで自分の抵抗を示したというように理解したのです。

歴史のなかに潜む連続と断絶を巡って

三島さんは、ある意味ではわたしよりも西洋的で、たとえばわたしは日本料理が好きなんですが、いっしょに食事をするときには三島さんは日本料理屋へ呼んでくださるんです。ところが、自分のお宅へ帰ってからステーキを食べるんです。日本料理ではお腹がふくれないというんですね。

しかし、いくら西洋の食物や美術などが好きだといっても、やはり日本人なんです。ですから、何か日本人としての遺産はないかとまじめに考えたんですね。他の同時代の作家たちは、自分と過去の日本とは断絶があるといっていました。三島さんはその断絶を否定したんです。ですから「近代能



「あとになってみれば、死を予感させるようなことはいくつかあったんですが、わたしは気がつかなかった。」

楽集」も書いたし、最後の4部作は「浜松中納言物語」にヒントを得ている。

そして、文学以外に日本の伝統は何かと考えた。最終的にたどりついたのが「天皇論」ということでしょう。でも、三島さんの「天皇論」は既成右翼の「天皇論」とはずいぶんちがいますよね。むしろ日本の右翼は、三島さんの「天皇論」は否定するんじゃないですか。とくに「奔馬」の中に右翼が登場しますが、実に親しみにくい憎むべき存在として描かれていますね。

そうすると三島さんの「天皇論」とは何なのか。それは今上陛下とは直接関係のない、日本文化の真髄、結晶というようなもので、「英霊の声」という作品の中では「天皇の真切り」というテーマを扱っているくらいです。

三島さんが東京大学で学生たちと対話をしたことがありますが、あのときに「天皇陛下万歳と一言いえば君たちと手をつなぐのに」といいました。しかしそこまで行くと、かなり特殊な政治になるでしょう。他はすべて許して、ただ一言で連帯するというなら、ずいぶん自由な右翼ですよ。

三島さんと最後に会ったのは自決の年の9月です。わたしがアメリカへ帰るとき、空港まで見送りに来てくれたんですが、これは長いつきあいの中でも初めてのことなんです。というのは、飛行機の出発時間が朝の10時なんです。三島さんは毎日夜の12時から朝の

7時まで執筆して、午後2時まで眠るという習慣なんです。それなのにその日は血走った眼をして無精ヒゲをはやしたまま見送りに来てくれたんです。それまでに迎えにはよく来てくれたんですが、見送りは初めてのことですから……。

三島さんは、これが最後だと思っていらたんでしょうね。

その1か月前にも思い当たることはあるんです。三島さんは毎年8月には家族と下田ですすことになっていたんですが、わざわざわたしを招いてくれました。ちょうど下田にはニューヨーク・タイムズの特派員がいらたんですが、彼もいっしょに「伊勢エビをこちそうしたい」ということで呼んでくださった。

それは三島さんを入れて3人の集まりですが、まず5人前注文したんです。そして5人前出て来たらすぐに女中を呼んで「7人前にしてくれ」というんですね。なんだかおかしいな、とは思ったんですが、三島さんはわたしたちにおいしい伊勢エビを思う存分食べさせたかったんでしょう。いかにも三島さんらしい好意の示し方ですよ。

他にも、あとになってみれば死を予感させるようなことはいくつかあったんですが、わたしは気がつかなかった。彼の死後、くり返し反芻している記憶です。

(インタビュー・構成/戸矢望)